



郷土史

ていね

第 117 号

平成 29 年 9 月 13 日
手稲郷土史研究会会報

平成 29 年 8 月 9 日(水)定例会発表要旨

三陸津波の体験「てんでんこ」の教え

手稲区連合町内会連絡協議会 会長 笹渕 吉弘氏

今日は、私が三陸で津波に遭遇し命からがら避難した体験と、その時に教えられた「てんでんこ」のお話をします。この言葉の解説は平成の三陸大津波（今日はあえてこのことばを使います）以降いろいろの方が言われていますが、私の経験談ですのでそのつもりでお聞きください。



1. 三陸津波の記録

- ①明治 29 年（1896）～明治の三陸大津波
- ②昭和 8 年（1933）～昭和の三陸大津波
- ③昭和 35 年（1960）～チリ地震津波
- ④平成 25 年（2011）～平成の三陸大津波

このように三陸は超大型の地震が発生しその都度約 30 分で、高さ 10 m もある大津波が襲来しています。この中に少し変わった津波があります。昭和 35 年に地球の裏側のチリで起きた地震の津波で一昼夜後に日本に襲来した津波です。このチリ津波以降何度も地震があり津波警報が出ていますが、せいぜい 30～50 cm 程度の津波で終わっています。

後でお話しますが、防潮堤ができたことでみんなが安心して、避難しなくなりました。いくら警報を出しても「オオカミ少年」のような感覚になったのではないのでしょうか。

2. 「てんでんこ」とは

明治と昭和の大津波を経験した古老からの言い伝えで「凄まじい速度と破壊力の塊である津波から逃れて助かるためには、薄情なようであっても、親でも子でも兄弟でも、人のことなど構わずにてんでんばらばらに、しかも急いで逃げろ。これが一人でも多くの人が津波から身を守り、犠牲者を少なくする」方法で、これが「てんでんこ」と教えられました。

3. 私とこの言葉の出会い

(1) 三陸海岸について

岩手県に三陸という地名はありません。戊辰戦争後の戦後処理で、陸奥の国が分割され「陸奥」「陸中」「陸前」と分けられました。地域はおおよそ「陸奥は青森県」「陸中は岩手県」「陸前は宮城県」ですが、あまりなじまなかったようです。明治 29 年の大津波の時に「三陸大津波」と報道したことで一般に知られるようになりました。

(2) 岩手県大船渡市での出来事

私は大船渡市で、1 万トン級の船が着岸できる－10 m の岸壁工事に従事していました。三陸の津波は地震があり 30 分くら



いで津波が襲い来るのが常ですが、昭和35年の津波は地球の裏側のチリで起きた地震によるもので、夢にも思っていない津波で大混乱でした。大船渡市だけで数百人の方が亡くなったと記憶しています。丹前1枚で高台に逃げた私どもが、宿舎にいた先輩がいないことに気づき探しに行こうとしたときに、土地の古老から「てんでんこ」だから動いてはダメと教えられました。

その日、仕事に来ていた船の人が「監督さん！海が変だから見でけれ！」と宿舎で寝ていた私どもを起こしました。丹前を着たまま工事中の岸壁を見に行きました。大潮でもないのに+2.5mの岸壁の高さまで海水面が来ていました。（多分第一波と思う）

参考までに+2.5mというのは標高です。土木の構造物はすべて標高を使って表します。見ている間に水位がどんどん下がり-10mの海底が現れ、作業船がみんな底をついて傾いていました。まもなく湾口の方から高さが数十mもあるような波がものすごい速さで迫ってきました。

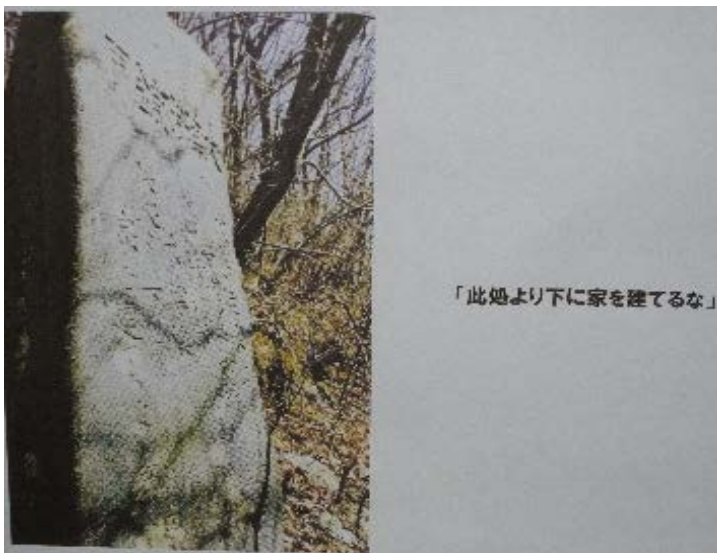
作業船の船員たちに「津波だ！逃げろ！」といわれて、無我夢中でまだ宿舎で寝ている同僚に声をかけ、300m先の高台に逃げました。津波の恐ろしさと、襲ってくるその速さにただ震えて見ていました。その時に言われたのが先ほど話した「てんでんこ」なのです。

4. 「てんでんこ」の本来の意味

平成の大津波以降いろんな有識者が言われている「てんでんこ」には、①自分の命は自分で守る②他者避難の促進(我ためのみならず) ③他者相互信頼の慈善醸成 ④生存者の自責感の低減の意味があるといえます。本当にそうでしょうか。学者や研究者が今流に解釈したのではないかと思います。災害発生時の避難方法として「自助」「共助」「公助」といわれますが、地震発生から30分以内で襲来する三陸津波には向かない言葉ではないでしょうか。自分を助けることさえ難しいのですから…。平成の大津波のような大型の津波では「共助」はほとんど無理と思われま

す。自分が逃げる時は何も考えられませんでした。ただただ恐ろしくて高台に逃げることで精いっぱいでした。その道すがら家々に声をかけて逃げたことは覚えています。自分の命は自分で守る、その途中共助すなわち声掛けくらいはできるかもしれません。これが本来の「てんでんこ」の意味ではないでしょうか。

5. なぜ平成の大地震はあんなに大きな犠牲があったのか



(1) 岩手県田老町の例

田老町は地形的に山と海に囲まれた非常に狭い土地です(三陸海岸の集落はほとんどがそうです)。この田老町が、明治の大津波で集落(150戸くらい)が全滅しました。その時に「てんでんこ」の教え通り高台に逃げて助かった方々が中心になって田老町は復興しました。

田老町の古い教えです。(イ) てんでんこを守れ！ (ロ) これより低い所に家を建てるな！(明治の大津波の一番高く波の来たところに今も石碑がある)。それでも昭和の大津波でまたも大被害を受けました。

その後、万里の長城といわれるような、高さ10m以上の防潮堤を造り集落を囲みました。そのお蔭でチリ地震津波の時は被害が全くありませんでした。

この教えを今も守っている集落があります。それは大船渡市越喜来町吉浜という戸数150戸の集落です。「これより低い所には家を建てるな！」の教えを守り高い所から全然移らず、今回の津波では人家や人命の被害はゼロでした。この古い教えをみんながもう少し守っていれば、少しは被

害が少なかったのかも知れません。

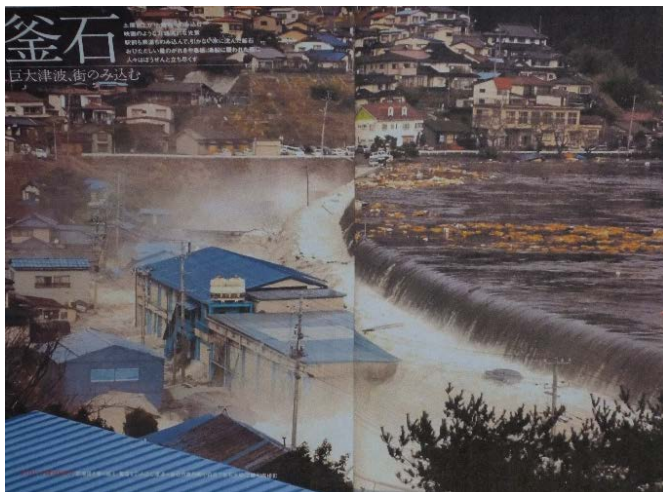
(2) 私の私見

この田老町の状況から、津波には防潮堤が非常に効果かあると判断されたのではないのでしょうか。三陸の海岸で人が住まいしている所すべてに高さ 5.0～7.0 mの防潮堤を造りました。これで地域の住民が安心して海岸近くの低い所に家を建て始めました。家がなかったところに防潮堤ができたことで、こんなに多くの家が建ち市街ができました。

東日本大震災は想定をはるかに超える大津波でした。防潮堤がすべて越波され、破壊されました。防潮堤で防げるという思いが被害を大きくしたのではないのでしょうか。防潮堤がなくとも、想定外の大津波でしたから被害は大きかったと思いますが…。

さらに釜石湾と大船渡湾に湾口防波堤を造りました。これは湾口幅 500m推進 80～100mくらいのところに兩岸から防波堤を築き、湾口を 200mくらいにしたものです。しかし、これも何の役にも立たなかったと思います。

6. 釜石の奇跡



釜石市の小中学生は特別な事情のある子は別にして、全員助かりました。この経緯をお話します。

釜石の奇跡の仕掛人は群馬大学 片田敏孝教授（現在は東京大学大学院教授）です。

片田氏は釜石市に「津波時の避難についての講演会」の講師として招聘されました。あまりにも参加者が少ないことに驚き、市の教育委員会と相談し小学生・中学生を対象に地震津波の時の避難の仕方を定期的に何度も訓練しました。その訓練の基本が「てんでんこ」だったのです。『まず君が一番に逃げろ！』と

教えたら、子どもたちは躊躇したそうです。そのあとに『君が自分の命を守り抜くことが周りの命を助けることになる！』と、またさらに『君が逃げればみんな逃げだす。君が率先避難者になってみんなを救うのだ！』と説明し、これを何度も何度も訓練したそうです。

今回の津波では中学生が率先避難者となり、小学生と地域住民の人たちがそれに続いて高台に避難したそうです。片田先生が教えた「てんでんこ」を実際に行ったのが釜石の小中学生です。これが「てんでんこ」です。しかし、親や兄弟をなくした子どもたちは大勢います。片田先生に言わせると「これは奇跡ではなく、訓練を積み重ねれば誰でもできるあたりまえのこと」だそうです。

釜石市の教育長が津波の 3 日後に先生を迎えたとき、「先生、お蔭さまで釜石の生徒は全員助かりました」と報告した時に、先生の第一声が「おめでとう」や「よかった」ではなく「遅かった！」だったそうです。

皆さん、この意味わかりますか。災害に対処できるのは、やはり訓練が一番です。

（たくさんの写真と動画を提示しての講話は、臨場感や説得力に満ちた感慨深いものでした。紙面の関係で一部割愛していることをお詫びいたします。（文責:永井）

松浦さんのしだれ桜

富丘在住 乙黒 道子会員

松浦稔さん(1924～2014)は剣淵町出身、北大卒後高校教師として道内各地に勤務、退職後現在の手稲区前田 8 条 9 丁目にお住まいになりました。

昭和 59 年に割り箸ほどの桜の苗木(医学生だった長男が演芸市で購入)を自宅の庭に定植、その桜は樹齢 30 年、樹の太さは 1.6 ㍍、高さ 6 ㍍、枝巾 8 ㍍の大木となり「松浦さんのしだれ桜」として地域の話題となり、テレビや新聞に紹介されています。



多い日には一日 300 人以上の見物客があったと言います。

このしだれ桜を母木とした子どもたちは 1,000 本以上も幼木として道内各地、遠くは北見市や和寒町、八雲町へそれぞれ贈られました。

私がお会いしたのは「桜の苗木を譲って欲しい」と尋ねた時からです。

その時既に 90 歳になられていた松浦さんのおじいちゃんに「売らないよ」と言われてガッカリしていると「タダならあげるよ」、植える所はあるの?と言いながら譲ってもらったのが最初の出会でした。その時譲って頂いた桜も私の庭で少しずつ花を咲かせています。

松浦さんのおじいちゃんと奥様の詩で迎えてくれた「しだれ桜」。その子供たちを、多くの人に伝えたくてマイクを持っています。

地元手稲区の各公園にも送られています。(手稲郵便局南角地にも松浦さんのおじいちゃんの子供が咲いています)。

松浦さんのおじいちゃんの桜は実生育苗です。もともと「しだれ性」のエドヒガンの変り性として出現したもので、実生では大半がエドヒガンの原型に戻り「しだれ性の出現率は 2～3%程度にとどまるため、実生による量産は不向きで、他に挿し木、接木育成等で活着率を向上させようと研究実験に取り組んでおられたそうです。(文責:佐々木)

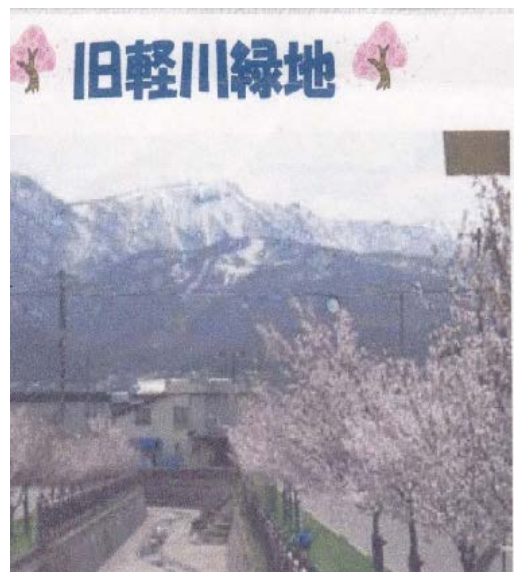


旧軽川緑地の桜と松浦さん

平成 8 年の旧軽川緑地の造成当時、手稲区土木部へ、近隣の公園に寄贈したいと申し出があり、手稲区の桜の愛護員を勤めていた松浦氏(当時前田連合町内会広報副部長)から 4 年間に 150 本以上の寄贈を受けた。(右図、旧軽川

緑地のほぼ全ての桜は松浦氏から寄贈されたもの)

松浦さんは「桜並木ネットワーク事業」の中心的役割を担うほか、公園等への植樹、桜の苗木の提供・病中害予防の研修に取り組まれていた。これらの功績が認められ平成 8 年度に市民憲章実践優良者を受賞されています。(平成 17 年 6 月号手稲区前田まちづくりセンターだより「ときの話、桜が咲いた」札幌市より資料提供)



次回の予定

手稲の昔の

植生をさぐる

菊地 敦司会員

10 月 11 日(水)

6:15 分

地民センター

視聴覚室

広報部よりお詫びと訂正…先月号 8 月 9 日発行「会報第 116 号」P3 の 20 行「近くの隣人同士」と語った。」を 23 行の末文に移動追記します。文書が乱れたことをお詫びします。